

Title	『福沢諭吉事典』の編集を振り返って
Sub Title	Reflections on completing "An encyclopedia of Yukichi Fukuzawa"
Author	松崎, 欣一 (Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.), p.199- 206
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2 : 事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『福沢諭吉事典』の編集を振り返って

松崎欣一

『福沢諭吉事典』は、『慶應義塾史事典』とならんで、『慶應義塾一五〇年史資料集』の別巻として位置づけられ、慶應義塾創立一五〇年および福沢諭吉生誕一七五年を記念して刊行されたものである。

慶應義塾福沢研究センター内に、福沢諭吉事典編集委員会が発足したのは二〇〇六年三月であった。『福沢諭吉全集』所収の福沢年譜の全文や『時事新報』の社説論題のすべてを入力整理するなどの準備作業はすでに前年四月頃から始まっていたから、本事典は二〇一〇年十二月末の刊行にこぎ着けるまでに五年半余りの時日を要したことになる。この間、編集委員会メンバーの多くと福沢研究センターのスタッフは慶應義塾創立一五〇年記念・福沢諭吉展の準備作業と、『慶應義塾史事典』の編纂作業に忙殺されて、当委員会は開店休業の期間が半年余に及んだが、月例の委員会は、四回の泊まり込みの合宿を含めて三十七回開催され、また、定例の委員会のほかにも作業部会が随時開催されて議論と必要な作業に取り組んできた。

編集委員会としての第一の課題は、事典に盛り込むべき内容と構成を具体的にどのように設定したらよいか

であった。それは近代日本の特定個人の名を冠した事典という、あまり類書がなく他に範を求めることが出来ない中で、文字通り無から有を生み出す過程であったように思う。読者対象をどこに設定するか、福沢諭吉という人物の生涯と事績をどのように捉え、それを事典全体としてどんなかたちで表現するか。たとえば、関係事項すべてを五十音順に配列した「引く（調べる）」だけの機能の事典とするか、個々の項目は小項目あるいは大項目いずれにするか、項目をどのように選定するかなど、どれを取っても容易に結論が出るものではなかった。十名の委員全員が分担をしてサンプル原稿を書き、委員会として読み合わせて討論を重ねるといって試行錯誤を繰り返しながら、おおよその枠組みができあがるまでにはほぼ一年が経過していた。そのあらましを記せば次のとおりである。

一、福沢に関心をもつ一般読者、学生、研究者など、多くの人びとを対象として福沢についての基礎的な知識を提供するとともに、さらに今後の研究課題の所在とその展開を図る手掛かりとなる諸情報を示すことを念頭において事典の全体を構成し、また個々の項目を記述する。

二、福沢の生涯を時系列にしたがって区分し、これに生涯全般に関わる事項「日常と家庭」を合わせて「I生涯」とし、福沢の生涯の履歴とその思想を展望することを事典の主軸とする。これに福沢人脈、著作、ことば等の関連する諸事項を交差させて全十部の構成とすることによって、幕末・明治の激動の時代を生き、近代日本を先導した福沢の全体像を明らかにする。

三、福沢が生涯に関わった人物を個々に取り上げ、「II人びと」として、多様な福沢人脈を示す。

四、福沢の著書、論説のうち、重要なものについては、「I生涯」のしかるべき個所でその執筆事情、時代背景、反響などを記述し、福沢没年までに刊行された単行書五十六点については、その内容を別途それぞれ

れに概観して「Ⅲ著作」とする。

五、「Ⅳ漢詩」として、福沢の漢詩作品一三〇首余の中から四十四首を取り上げ、そこに詠み込まれた折々の福沢の思索の跡を辿る。

六、「Ⅴことば」として、福沢の思索や行動を理解する鍵となる語句やフレーズを、著書、論説、あるいは折にふれて処世観などを述べた文章、また福沢の揮毫などから集め、その意義を解説する。

七、諸資料として、「Ⅵ表象」「Ⅶ福沢書簡宛名一覧」、福沢在世中の「Ⅷ『時事新報』社説・漫言論題一覧」、
「Ⅷ年譜」、福沢著作のテキストを中心とした「Ⅹ基本文献」一覧を付す。

八、原稿は記名原稿とする。すでに先行して刊行した『慶應義塾史事典』においても、原則として各項目の執筆者を末尾に示したが、『福沢論吉事典』においても文責を明示した。

「生涯」編の小項目の選定と記述作業は必ずしも容易ではなかった。「読む事典」として読みやすさに配慮する一方で、「調べる事典」として確かな拠りどころとなるということをも目指す方向で、編集の最終段階まで検討が重ねられ、項目の加除修正、また配列の変更などが繰り返し行われた。当初、『福翁自伝』、石河幹明『福沢論吉伝』、会田倉吉『福沢論吉』、富田正文『考証福沢論吉』などを主な手掛かりとして約二〇〇の小項目が試案としてリストアップされた。ただ、このリストは『福翁自伝』の記述自体とこれまでの福沢研究のありかたを反映して、福沢の前半生に比重が傾き全生涯の閲歴を通覧するには不十分で、後半生についての小項目の立項を相当に充実させる必要があると判断された。また、サンプル原稿の執筆と検討の過程では、生涯を区分する時期を大項目としてその記述を先行させ、その上で新たに小項目を設定して補っていくことが確認さ

れた。各時期を概観するサンプル原稿を各編集委員が「梗概」として分担執筆したが、読みやすさを考慮して典拠文献の直接の引用は極力抑え、研究史的記述なども最小限にとどめるよう配慮することとした。

「生涯」編の時期区分について、最終的には時系列の「1 生い立ち」「2 蘭学修業」「3 英学への転換」「4 文明の始造」「5 建置経営」「6 晩年」と、時系列では扱いきれない事項を扱う「7 日常と家庭」の全七章にまとまった。一連の時期区分の名称の中で、維新前後から明治十年前後までの福沢の諸活動を扱う「4 文明の始造」はいうまでもなく『文明論之概略』「緒言」で使われた用語であるが、明治十年前後から二十六年頃までを扱う「5 建置経営」は福沢の未完草稿で使われた用語から名付けられた（「掃除破壊と建置経営」『福沢諭吉全集』第二十卷）。この章はさらに「①慶應義塾」「②民権と国権」「③理財と実業」に三分された。こうして、「読む事典」としては各章の冒頭に置かれた「梗概」を通読することにより福沢の生涯の概略を理解し、「調べる事典」としては各章の小項目を通じてさらに掘り下げていけるといえるという構成になった。特に「5 建置経営」「6 晩年」「7 日常と家庭」には、これまで福沢を論じた文献にあまり取り上げられることになかった事項が数多く立項されて、「生涯」編の小項目は最終的には全四三八項目となった。

個々の事項の記述については、単に事実として生涯の閲歴のみを記すのか、福沢のその時々々の思想の特質についてどのように解釈して記述するのか、執筆担当者の見解をどこまで書き込むべきかなどさまざまな問題が検討されたが、福沢の歴史的評価に関わるようなことにはあまり踏み込まず、その議論のための素材を読者に提供することを目指し、読者のより高度の要求に応えるため、小項目各項に原則として参考文献を明示することとした。また、執筆の実際については、全項目の記述の整合性と一貫性を重視して、編集委員が最大限の負担をして外部への依頼原稿は極力抑えること、また各章の「梗概」執筆者が当該章全般の調整をすることなど

が確認された。

福沢に関わる多くの人物をどのように取り上げるかについて、当初は時系列に添う「生涯」編で扱うことの模索もなされたが、結論としては「人びと」として独立させ人名の五十音順に配列することに落ち着いた。人物のリストアップについては、福沢書簡の名宛人別の書簡数の多寡をひとつの手がかりとした。福沢書簡の名宛人は約六〇〇人に及んでいるが、ひとまずこのうち書簡が三通以上ある人物を対象とし、このほかに福沢との関わりから採択が不可欠であると考えられる人物をあわせ、さらに事典として人物編にあてられる最大限のページ数を考慮して最終的に「二三九人を扱うこととなった。これらの人びとのうち、福沢人脈の広がりの特質を浮き上がらせるために「中津藩の人びと」「緒方塾の人びと」「実業界の人びと」などというように群像として記述する視点を取り入れたいという議論もなされたが、全体的なページ数の制約などから見送られた。

「著作」についてはすでに『福沢論吉全集』各巻に収録著作の主として書誌学的解説が詳しくなされているが、これにとどまらず、『西洋事情』『学問のすゝめ』『文明論之概略』『福翁自伝』などの主要著作とされるものを含めて、福沢の全著作の具体的な内容そのものを個々にまとめて示すことの重要性が議論された。最終的には五六点の著書の内容に関する個々の解説項目と、福沢没年までに刊行された単行著作初版の書誌情報を簡便なかたちにとまとめた「著作単行書一覧」を付すことになった。また、福沢が外国方に出仕して翻訳した外交文書訳稿のうち『福沢論吉全集』第二十巻所収分、および全集未収録稿（小野修三）『福沢論吉全集未収録幕末外交文書訳稿十三篇』『近代日本研究』第二十三巻）をまとめた「幕末外交文書訳稿一覧」を合わせて「著作」編が構成された。

また、著作などからは窺いにくい福沢の人間性やその時々的心境を知ることができる「漢詩」を取り上げることにも検討された。明治十一年以後に作られた一三六首〔詩集〕『福沢諭吉全集』第二十卷所収)の中から、福沢の揮毫などに用いられることの多い四十四首について、訓読と文字の異同、訳、解説を付して収録することになった。

これらの作業とは別に福沢の思索の核心を示す語句、フレーズなどを著作や書幅などから取捨選択しその意義について解説することの必要が議論された。すでにこれまでにあるいわゆる福沢の名言集といった類のものを超えるかたちが模索され、最終的には、選択された二〇〇余の福沢の語句やフレーズについて、1 人間(人間、男女、家庭)、2 文明(文明、独立、自由・平等)、3 社会(交際、徳教)、4 学問(実学、学者、俗文、工夫)、5 教育(教育、義塾)、6 実業(実業、金銭)、7 立国(国民、立国、民権・国権、外国交際)、8 処世(人生、処世、生涯)という八つのカテゴリーとさらにその下位の数区分により分類し、その枠組みのもとでそれぞれの語句やフレーズの意義について解説した「ことば」としてまとまった。

委員会発足当初のプランにあった「さまざまな福沢像」は、福沢生前から現在に至るまで時代により福沢像がどのように推移してきたのかについて、主要な研究文献リスト付すことなども含めて何らかの形で取り上げたいということであったが、福沢研究史については、テーマ別にしても年代別にしても、いずれも困難な作業になることが予想され、福沢についての客観的な評価の問題が絡んで今回の事典の形式で捉えることは難しいとの結論にいたった。文献目録にしても、とくに研究文献の取捨選択の基準設定が容易ではなく、また今日までに発表された量的にも膨大な文献を網羅的に取り上げること事実上困難であった。最終的には、「基本文

献」という章を立てて、福沢および福沢の著作を知るための手引となる基本的テキストとして、全集、選集、著作複製本、現代語訳された著作、外国語訳された著作、福沢著作注解・評釈書、福沢遺墨集、福沢書簡集などのほか、福沢の伝記・評伝、回想録・言行録、展覧会図録、文獻目録などの書誌情報を収録することにした。編集作業が進むにつれて、各章相互の関連性も考慮しなければならなかった。例えば、ある人物が生涯編と人物編の両方で、また、ある著作が生涯編と著作編の両方で取り上げられる場合、人物については生涯編では福沢と当該人物との関係に重点を置いて記述し、人物編ではその人物の個別情報の提示を主眼とすること、著作については、生涯編では著作執筆の背景や反響に重点を置き、著作編では内容や書誌情報を扱うことにした。また『福沢論吉事典』『慶應義塾史事典』の両方で同一事項や同一人物が記述される場合についても検討され、前者では福沢との関わりに、後者では慶應義塾との関わりに重点を置くこととした。

「福沢年譜」（『福沢論吉全集』第二十一巻）の全データ、および『時事新報』社説・漫言論題の入力作業が完了したことを受けて、これを事典にどのように反映すべきかという点が検討された。「福沢年譜」の入力データから、明治十五年分をサンプルとして抽出して検討を重ねた結果、『福沢論吉書簡集』によって確定した書簡の発信年月日の変更を反映し、かつ『全集』収録の詳細な年譜をできるだけ簡略化して見やすく使いやすいものにするのが確認された。最終的には全集年譜では明示されている各事項の典拠、書簡の受発信、『時事新報』の執筆関係については「年譜」としては思い切って省略することとなった。ただし、全く削除するのではなく、「年譜」とは別に、「書簡宛名一覧」「時事新報』社説・漫言一覧」という章を立てることにした。『時事新報』社説・漫言に関しては、福沢存命中の論題をすべて掲載した上で、それらの論説の『全集』への収録の有無、また福沢自筆の原稿の存在などにより自筆または加筆が確認できるものについてはその旨を記号

で示すことにした。「幕末外交文書訳稿」についても「著作」編に移して、「年譜」からは除くことになった。

さらに、読んで調べるだけでなく、見て楽しむことのできる事典とすること、また、福沢を理解する上で幅広い視点を提供することを意図して、福沢の肖像、福沢の家族の肖像、墨跡（揮毫、原稿、書簡）、印譜、遺品、慶應義塾構内図、校舎・福沢邸、描かれた福沢諭吉などの多くの写真図版を収録し、また福沢の外国旅行、国内旅行の足跡を記した地図なども盛りこんだ「表象」の一章を立てることとした。

以上のような道のりを経て、最終的には全十部構成（「Ⅰ生涯」「Ⅱ人びと」「Ⅲ著作」「Ⅳ漢詩」「Ⅴことば」「Ⅵ表象」「Ⅶ書簡宛名一覧」「Ⅷ『時事新報』社説・漫言一覧」「Ⅸ年譜」「Ⅹ基本文献」）、A5判・一一三二六ページというかなり大部な一冊の事典が完成したのである。